

イエスの昇天

見よ、わたしのしもべは栄える。
 彼は高められて上げられ、きわめて高くなる。
 (イザヤ 52 : 13)

□ イザヤの預言

冒頭の聖句は、旧約聖書の預言書のひとつ、「イザヤ書」の中の一節である。

イザヤ・・・イエス・キリストが現れる約 700 年前の預言者

イエス・・・個人としての名

キリスト・・・「油注がれた者」という意味で、イスラエルの王を指す

それも普通の王ではなく、信じる者を罪と死から解放し、地上に正義と
 平和の国を建てる王

旧約聖書・・・キリストについて預言する書

新約聖書・・・イエスこそがそのキリストであること、そして実は、

神ご自身が人となられたお方であったと証言する書

「見よ、わたしのしもべは栄える」

「わたしのしもべ」とは、「神のしもべ」とも呼ばれるキリストを指す

「栄える」は、ヘブル語の元々の意味は「賢くふるまう」

聖書で「賢い」とは神を信じ、神のみこころに従うことを言う。

キリストは、しもべのように自分を低くして、神のみこころに従ってふるまう、と
 いう預言である。

その預言のとおり、イエスは人々に仕える者のようにして、病人を癒やし、苦しんでいる人を助けた。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しく裁かれる方である神にお任せになった (I ペテロ 2 : 23)。

その結果は、どうなるのか。預言は次に続く。

「彼は高められて 上げられ、きわめて高くなる」

3 回も同じようなことばが繰り返されている。「高められる」、「上げられる」、「きわめて高くなる」 ⇒ キリストが 3 つの段階を経て、高く上げられることを示している

第一段階、「高められる」・・・イエスは十字架にかかって死んで墓に葬られ、その靈魂はよみに下った。第一段階は、よみからの復活である。イエスは死んでから三日目に、よみから上り、復活のからだをもって地上に立った。

第二段階、「上げられる」・・・復活から 40 日間、イエスは弟子たちに現れて、ご自身が復活したことを示した。そのあと、エルサレムの東の山、オリーブ山から天に上げられた。第二段階は地上から天へ、これを「イエスの昇天」と呼ぶ。

第三段階、「きわめて高くなる」・・・イエスは昇天すると、神の右の座に着いた。「神の右の座に着く」とは、神と等しい地位であることを意味する。第三段階は、天におけるイエスの地位が最高に達し、神としての栄光に輝くお方に戻ること。

□ 元々、神であったお方であれば、神と等しい地位に着くのは当たり前か？

イエス・キリストは、元々、神であったお方が人の肉体をまとって、地上に現れてくださった。では、天に戻ったときに、神に戻るのは当たり前か？ そうではない。

イエス・キリストは、天に上げられるとき、復活の体とはいえ、人の体を持ったまま天に上げられた。元の「神」としての在り方に戻ったのではなく、今や「神であり人であるお方」として天におられる。人としての在り方も持ち続けながら、しかも神と等しいお方となられたのである。

その理由を聖書はいくつか教えているが、本日はその中から三つを取り上げる。

第一は、地上に再び来て、正義と平和の国を建てるため

イエス・キリストは天に帰ってしまったのではなく、再び地上に戻って来られる。そして、全地を支配する王になる。そのために、人としての在り方を持ち続けている。

第二は、私たち信者を助けるため

私たち信者は、キリストの王国の民となる。キリストが王国を建てるためには、王一人では成り立たない。王に従う民が必要である。

イエス・キリストは天に昇ったあと、イエス・キリストを信じ従う者たちをこの世から呼び出し、育てている。そして、父なる神と私たち信者の間に立って、仲介し、とりなし、私たちを助ける働きをしておられる。そのような働きを、聖書では「大祭司の務め」と言う。大祭司は私たち信者の代表であるから、私たちと同様、人でなければならない。

イエス・キリストは今、人としての在り方を持って、天で大祭司として働いておられる。

第三は、私たち信者の先駆けとして天に入るため

イエス・キリストが人の体を持ったまま天に上げられ、天に入ったのは、私たち信者のために「先駆けとして」であった（ヘブル 6:20）。先駆けとは、その後続く者たちがいるという意味である。私たち信者も、新しい栄光の体を与えられて、天に上げられる日が来る。

□ イエス・キリストは天に帰ってしまったのではなく、地上に戻って来られる

1. 昇天前 使徒たちへの命令

使徒 1:3~5 イエスは苦しみを受けた後、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。四十日にわたって彼らに現れ、神の国のことを語られた。

使徒たちと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。

「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。

ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。」

- **神の国**・・・イエスが弟子たちに教え、弟子たちがこれから伝えていくのは「神の国の福音」である。その神の国については、2つある。

第一に、「キリストの王国」

イスラエル指導者層のキリスト拒否（イエスをキリストではないと拒否したこと）により、「キリストの王国」は当時のイスラエルの世代から取り上げられて、将来の世代へと先延ばしとなった。

第二は、「奥義としての神の国」

- 奥義とは、旧約聖書の時代には隠されていて、新約聖書ではじめて明らかにされたことを意味する。新約聖書には十の奥義があるが、「奥義としての神の国」はその一つである。
- 奥義としての神の国は、イスラエル指導者層のキリスト拒否により、すでに始まっていた。その終結は、将来、全世界をおおう七年間の大患難期を経て、マタイ 25 章 31 節から 46 節に預言されている「諸国民のさばき」である。そのさばきの後、キリストの王国が建国され、キリストによる世界統治がスタートする。
- 「諸国民のさばき」とは、大患難期を生き延びた人々を、キリストの王国に入れる人とそうでない人に分ける審判である。
- 奥義としての神の国の時代的特徴を、一言で言えば、「福音の種まき」。宣教活動は大きく広がっていく。ただし、組織的に巨大化するとともに、一部には偽の教理や欺きがはびこる。

- **父の約束**・・・父の約束とは、弟子たちにとっては二つある。

- キリストの王国に関連した約束・・・彼らがイスラエル十二部族を統治する地位に着くという約束
- 奥義としての神の国に関連した約束・・・イエスが地上からいなくなったあと、もうひとりの助け主として聖霊が遣わされるという約束

- **聖霊によるバプテスマ**・・・これは、弟子たちにとっては、キリストの王国に関連した聖霊の働きを連想させる。キリストの王国が建てられる直前に、イスラエル民族全体が神の霊を注がれて神の選びの民にふさわしくされるという預言が、旧約聖書にある。

このことについては、バプテスマのヨハネも、メシアが来て聖霊のバプテスマを受けると語っていた。

マタイ 3:11 私はあなたがたに、悔い改めのバプテスマを水で授けていますが、私の後に来られる方は私よりも力ある方です。私には、その方の履き物を脱がせて差し上げる資格もありません。その方は聖霊と火でああなたがたにバプテスマを授けられます。

2. イエスの昇天

(オリーブ山に集まったとき、弟子たちの質問)

使徒 1:6 そこで使徒たちは、一緒に集まったとき、イエスに尋ねた。

「主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」

- **集まったとき**・・・後述の 12 節には、集まった場所が「オリーブ山」とある。エルサレムの東側に位置する山である。
- **国を再興してくださるの**は、**この時なの**ですか・・・国を再興するとは、キリストの王国を建国するということ。弟子たちは、父の約束と聖霊のバプテスマを、キリストの王国に関連することとして理解していた。

(イエスの答え)

使徒 1:7~8 イエスは彼らに言われた。

「いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。

しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

- **いつとか、どんな時とか**・・・いつまで「奥義としての神の国」が続くのか、いつ「キリストの王国」が建国されるのか、それは弟子たちが知るところではない。
- **聖霊があなたがたの上に臨む**・・・弟子たちが間もなく受ける聖霊のバプテスマは、イスラエルの民族的救いを予表するものであるが、弟子たちにとっては「奥義としての神の国」において宣教の働きをするための力を受けるため、イエスの証人となるため。

(イエスの昇天)

使徒 1 : 9~12 こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。

すると見よ、白い衣を着た二人の人（天使）が、彼らのそばに立っていた。そしてこう言った。「ガリラヤの人たち（使徒たち、11 人全員がガリラヤ地方出身）、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

そこで、使徒たちはオリーブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に歩くことが許される道のりのところにあった。

- **包み**・・・直訳すると「足もとに来て」

雲がイエスの足もとに来たので、下から見ている使徒たちの目には、上って行く雲は見えていたが、イエスの姿は見えなくなった。

- 波線部の 3 つ、上げられた、上って行かれる、天に上げられた・・・異なる三つの動詞。それぞれ直訳すると、「上げられた」、「旅に出た」、「旅の行った先は天」。イエスは天に帰ったのではない。一時的な旅に出て、その行先が天である。

そしていつの日か、地上に戻って来られる。

- 天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります・・・イエスが地上に戻って来るときは、同じ有様で=雲に乗って、おいでになる。イエスが地上に戻って来るときに最初に立つ場所は、オリーブ山ではない。大患難期の末期、ハルマゲドンの戦いが起きる。イスラエル民族の多くが避難する先は、ボツラ（現代の南ヨルダンのペトラ）。ボツラにいるイスラエル民族の指導者たちがついに、イエスをキリストとして認め、それまでの民族的罪を悔い改めて、イエスに戻ってきてくださいと祈り求める。イスラエルの民族的救いが起きて、それからイエスがボツラに再臨する。（ミカ 2 : 12~13、イザヤ 34 : 6）

- （参考）安息日に歩くことが許される道のり・・・直訳は「安息日の道のり」。安息日は休みの日であり、仕事をしてはならない日である。出 16 : 29 には、「自分のところから出てはならない」とあるが、外出してもよい距離や範囲についてモーセの律法に定めはない。安息日に移動してもよい距離として、ユダヤ教ラビたちが教えた距離は「二千キュビト（約 1 キロメートル）」であった。根拠はなく、ヨシュア記 3 : 4 の準用。

□ イエス・キリストは今、大祭司として働いておられる

1. 天の幕屋において私たちの大祭司として（ヘブル 4：14～16）

14 節 さて、私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。

- もろもろの天を通られた・・・第一の天、第二の天を通過して、第三の天に入った。第一の天の霊界はサタンと悪霊たちがいる領域であるが、彼らはイエスの通行を妨げることはできなかった。これに対して、モーセの律法のもとでの大祭司は、地上の限られた場所である幕屋（神殿）の中を通過していただけであった。これと、比較すれば、いかにイエスが偉大か、わかる。

15～16 節 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

- すべての点において、私たちと同じように試みにあわれた・・・イエスがメシアとしての公生涯三年半の開始時に受けた、サタンによる誘惑を指す。そのときの 3 つの誘惑は、罪の 3 つの類型（I ヨハネ 2：16「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢（プライド）」につながっていた。これにより、私たちが受けるあらゆる誘惑、試みについて、イエスは経験済である。
- 恵みの御座・・・モーセの幕屋では、契約の箱のふた（贖いのふた）を指す。その上に神の栄光が輝いていた。天の幕屋では、恵みの御座とは、まさに父なる神がおられる神の座である。

2. 信者は「キリストにある」という地位にある。この地位により、今すでに信者もキリストとともに天に座しているというのが、霊的現実（エペソ 1：20～21、2：6）

1 章 20～21 節 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。

2 章 6 節 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。

- これは将来の約束ではない。今すでに私たちに与えられている地位である。

□ 私たち信者も、新しい栄光の体を与えられて、天に上げられる日が来る

信者は、「キリストにある」という地位を与えられ、今すでにキリストとともに天に座っている。これは目に見えない霊的現実であるが、それが、まさしく現実が変わる日が来る。目に見えない普遍的教会に属する真の信者が、地上から天に上げられる日である。その日、信者の内側からは罪の性質が消え、外側の体は朽ちない不死の体に変えられる。その日、信者は、内側も外側も、まさしく「キリストにある者」としてふさわしい者に変えられ、霊と体の両方をもつての現実として、天に座る日が来る。

イエスは、私たち信者の先駆けとして、人の体をもったまま、天に上げられたのである。

ヘブル 6:20 イエスは、私たちのために先駆けとして そこに入り、メルキゼデクの例に倣って、とこしえに大祭司となられたのです。

- そこに・・・「幕の内側」(6:19)、天にある本物の幕屋の至聖所。イエスは、天にある本物の幕屋で仕える永遠の大祭司となった。「メルキゼデクの例に倣って」とは、旧約聖書の創世記に登場する「メルキゼデク」という祭司(創世記 14:18)のように、大祭司と王の二つの役割を一人の人が兼ね備えている、という意味。
- 先駆けとして・・・イエス・キリストが人の体を持ったまま天に上げられ、天に入ったのは、私たち信者のために「先駆けとして」であった(ヘブル 6:20)。先駆けとは、その後続く者たちがいるという意味である。

私たち信者も、新しい栄光の体を与えられて、天に上げられる日が来る。

□まとめ： 天に上げられたイエスが、人としての在り方も持ち続けている、3つの理由
第一は、地上に再び来て、正義と平和の国を建てるため

イエス・キリストは天に帰ってしまったのではなく、再び地上に戻って来られる。

そして、全地を支配する王になる。そのために、人としての在り方を持ち続けている。

第二は、私たち信者を助けるため

イエス・キリストは、王国の民となる人たちをこの世から呼び出し、育てている。そして、父なる神と私たち信者の間に立って、仲介し、とりなし、私たちを助けてくださる。そのような働きを、聖書では「大祭司の務め」と言う。大祭司は私たち信者の代表であるから、私たちと同様、人でなければならない。イエス・キリストは今、神でありながら人としての在り方を持って、天で大祭司として働いておられる。

第三は、私たち信者の先駆けとして天に入るため

イエス・キリストが人の体を持ったまま天に上げられ、天に入ったのは、私たち信者のために「先駆けとして」であった。先駆けとは、その後続く者たちがいるという意味。私たち信者も、新しい栄光の体を与えられて、天に上げられる日が来る。